

第六三回卒業式式辞

皆様、おはようございます。本日、久留米大学附設高等学校は、第六三回の卒業証書授与式を迎えました。六三回生の皆さま、おめでとうございます。保護者の方々も、本当に長い間、お子様を支えて来られました。本日のお子様の晴れ姿、さぞやお慶びと存じます。おめでとうございました。

また、この場には、卒業生の皆さんを寿ぐべく、ご多忙の中、学校法人久留米大学神代正道理事長、久留米大学永田見生学長、久留米大学附設高等学校同窓会長谷川房生会長、久留米大学附設高等学校・附設中学校後援会島添隆雄会長を始め、退職された恩師の先生方を含むご来賓の方々がご列席になっておられます。ご来賓の皆さま、ありがとうございます。

さて、卒業証書を授与される生徒諸君の中には、わたくしと共に、六年の間、ずっと附設で過ごした人もいれば、三年前から附設で学んでいる人たちもいます。六年前の入学式の式辞を覚えている人がどのくらいいるかはわかりませんが、今、読み返してみると、建学趣旨の解説がおもな点であります。他に、校舎の建て替えの話をしており、順調に行くと新校舎から巢立つことになるだろう、と述べております。東日本大震災の前であったこともあって割と気楽だったわけですが、三年前の入学式では、基本的に予定調和の世界などないのだから、心掛けとしては何が起きても対応できるように、皆さん一人ひとりが自らの総合的な人間力というべきものをひたすら高めることが望まれると言っております。皆さん一人ひとりの人生は皆さんだけが選び取っていくものなので、今に即しすぎた判断に安住したり、他の誰かに決めてもらったりすることが、本当はできるものではないというようなことを言ったわけです。

ちょうど一週間前ですが、皆さんの大先輩の國武豊喜先生の文化勲章をお祝いする会が福岡で開かれました。國武先生は、ご講演で、先生のほぼ八〇年の人生のほぼすべてを一时间余りで網羅されたので、到底、ここでは紹介できませんが、「研究は楽しい、科学は(も)面白い」という述懐で締めくくられたことはお伝えしましょう。

國武先生の進路選択は、附設で出会った先生たちの授業に拠るところが多かったようで、国語の先生の授業を聞いて国文学は面白そうだと思ひ、また、当時は、久留米大学商学部や医学部予科の先生たちが附設高校の授業にも来ておられて、経済学の先生の授業を聞いては、経済学も面白そうだと思われたようですが、化学の先生の授業からも強い興味を覚え、ご自身の適性というか、得意不得意をよくよく考え、結局、お父上との進路上の妥協が成り立つところで、工学部の応用化学に進まれました。特に、研究者になろうと思つて

いたわけではないが、実際に研究に接してみて、その面白さに取りつかれ、今日に至ったということでした。

それが「研究は楽しい。科学は（も）面白い」という次第ですが、人間、どうしても好奇心がある、新しいこと、わからないことがあると、知りたくなってしまう、と、補足されています。しかし、改めて考えてみるまでもなく、何でもかんでもが不思議だ、面白そうだ、というわけではありませんし、一瞬、不思議だと思っても、見掛けだけであることもありまますから、不思議さ、面白さを、何と言うか、正しく感知する力を得るために払われた努力や、その過程での膨大な数の失敗があったに違いないと思わざるを得ません。そして、失敗に耐えるには、ものすごい精神力が要ります。

さて、皆さんのこれからの進路は、必ずしも創造的な研究者への道も開かれているというものばかりではないでしょう。また、社会系、あるいは、人文系であって、要するに、大先輩ではあるが、國武先生の話は関係ないと思っている人も多いかも知れません。確かに、皆さんが経験して来たばかりの入学試験にせよ、また、これからしばらくの間、いろいろな試験に出会いますが、それらは、資格試験も含めて、正解があり、それも基本的には一通りという性格のもんです。皆さんにとっては未経験であっても、すでに多くの人たちによく知られてしまっているもので、つまり、できたからと言って、それだけでは世界が変わることもなく、したがって、何も新しい価値は生まれて来ません。

しかし、この段階を過ぎると、皆さんは、否も応もなしに、答えのはっきりしない、場合によっては、もともと正解などない、そういう問題に出会うことになります。一人前になるということは、まさに、こういうことです。國武先生は、「研究は楽しい」とおっしゃいました。皆さんの将来に当て嵌めて、この言葉を解釈すると、未知のこと、知らないことに出会うことは楽しい、と、そういう風に理解できませんか。

今日、皆さんは久留米大学附設高等学校の卒業証書を手に入れます。しかし、それは、まだ、一人前になる前の一連の訓練の始まりに過ぎません。そこを通過すると、先ほども申し上げましたが、皆さん一人ひとり、それぞれ、違う挑戦や困難にやがて出会うことになります。挑戦、あるいは、困難というのとは何か。要するに、魅力たっぷりだが、どうしたらいいのかはすぐには分からないことです。しかし、困難に出会うことは楽しい。なぜか。それは、うまく乗り越えられたら手柄になるからでしょうか。いいえ、違います。

まず、あなたは、今、目の前の挑戦が、なぜ「困難」なのか、それを、手持ちの時間内でできるだけはつきりさせなければなりません。そして、あなたの全存在を掛けなければこの困難は乗り越えられない、と一瞬ではあっても感じられたなら、困難の解決が見えて

きたとき、今、自分は確かに生きているという実感が得られるでしょう。ここで抽象的に「挑戦」さらに「困難」と申し上げたことは、具体的には、皆さん一人ひとりにとって全部異なります。乗り越え方も当然違います。生きているという実感、その味わい方も皆違うでしょう。恐らく、確かに自分の課題だと感じられるものに直面した後の、最初の失敗、そして最初の成功、どんなにささやかなものであっても、それらが皆さんのそれからの人生の質を左右することになるのではないのでしょうか。

こんな話を致しますと、それではお前はどうかなのか、「挑戦」は楽しいのか、「困難」は好きなのか、と思いつながら、皆さんは聞いているかもしれないかもしれません。わたくしは別に「困難」大好きというわけではありませんが、嫌いではありません。「挑戦」、つまり、目指すものがあって、それを実現して行こうとする過程では、必ず、何らかの壁や障害など、予想外のことがあり、予想外ですから、事前に対処の仕方、つまり、答えがわからないというようなことに何回か出くわしています。附設の校長になってからも、大げさに「困難」というべきかどうかは別として、答え探しに悩み、あるいは、まだ、悩み続けているというものも結構あります。

國武先生のお話とわたくしのささやかな経験とを重ねあわせながら、改めて整理してみますと、まず、やりたいこと、実現したいことが、見える、あるいは、見えてしまう、ということがありましょう。その基礎は、結局、質の高い勉強、つまり、知らないということとを痛感できるような勉強でしょう。皆さんは、これからしばらくの間、正解のある勉強を続けなければなりません。この古典的と言ってもいい基礎的な過程でじっくりと地力を蓄えることになります。しかし、ここが大事で、附設での教育も入りますが、皆さんの人格の基盤を創ります。その上で、皆さん一人ひとり固有の課題というものが見えてきます。実際に、困難に直面したときの取り組み方はどうしても皆さんの人格を映しているものです。

そんなわけで、皆さんは挑戦と困難に直面し、さらに、それを何とか乗り越えなければ、やりたいこと、実現したいことが、成就しないということになります。乗り越えるには、試行錯誤、しかも、自分ひとりの力だけでは、いくら才気があっても、うまく行きません。國武先生の業績も、最初に、こういうものを合成したい、という想いを抱いてから、実現できるまでに長い時間とそして多くの人たちの協力が欠かせませんでした。実際、先日の國武先生の会の際、控室で、先生がこういう仕事はひとりではできませんからね、と述べられたことを覚えています。そこで、皆さんの場合も、困難に直面しても、他の人たちからのいろいろな形の援助がなければ、乗り越えられないでしょう。

他の人たちからいろいろな折に助けてもらえるには、どうであつたらいいのでしょうか。

そう、それには、あなたが魅力的であれば非常に有利だと思います。中でも困難に際しての魅力、それは楽しそうに困難に立ち向かう姿勢ではないかなと思います。困難が好き、困難に立ち向かうのが好き、という人の廻りには、自然と、人が集まるように思います。そして、困難は無事に乗り越えられ、その次に立ち現われる困難もまたしかり、というわけで、困難ということを恐れなくなり、結果から言えば、大体何をやってもうまく行くという感じになります。皆さんも魅力的な人になることに挑戦してください。

最初の方で申し上げたように、皆さんがどういう進路をとろうと、ほぼ確かに起こるだろうというシナリオですが、その構成を振り返ってみましょう。

舞台の袖は附設です。多分、最初の幕が上がる前に、あなたは幕の前を本とかパソコン、あるいは、ノートを持って徘徊する。そして、動きを止めてきりっとして観衆に向う。そこで、幕が開く。舞台装置としては咄嗟に何とはわからないような、いろいろなものが置かれている。あなたは、何をしたい、いや、しなければならぬ、と言い、本などを抱えたまま、ある装置の廻りをぐるぐる回る。そうして、一旦、立ち止まって、本やパソコンやノートを置いて、また、ぐるぐる。装置に手を掛け、動かそうとする。なでたり、叩いたりする。ここで、あなたは頭を抱え、幕が降りる。

幕間で、あなたは装置の模様を眺めている。

幕が上がると、装置の周辺は整理されている。あなたは何か道具を持って現れる。再び、装置の廻りをうろろする。やっぱり、とか、あ、そうか、とか、あるいは、ふーん、という声をだす。そのうち、あなたの廻りに人が集まってきた。一旦、幕。

幕が上がると、装置の前で大勢の人に向って、あなたは楽しそうな顔で何をしたいか、そうしたら何ができるのか、なぜ、面白いのか、身ぶり大きく説明している。すると、一緒に装置に手を掛ける人たちが出て来る。

そうして、みんな一緒に装置を分解しはじめる。最後に装置はきれいに分解されて、部分に分けられてきれいに並べられ、あなたに、拍手が贈られる。

とこんな具合になると思います。つまり、今は、まだ、皆さんの人生の幕が上がったと言えるところではなく、舞台の袖で出番を待っているところでしょう。演技の基本は身に着けたか、セリフは覚えたか、衣装はきちんとしているか、などを確かめているわけです。

もちろん、実際の人生はシナリオのある演劇とは違いますが、舞台の成否が出番前の準備にあるように、附設での生活とこれからまだしばらくの学習が人生での成否の鍵になります。特に、附設での時間は皆さんの人格形成の時期でもありました。表舞台に出る前の

一番大切な時期であつたわけです。さればこそ、附設で何を学んだか、何を身に着けたか、よく振り返ってみましょう。附設にいたからこそ学べたこと、長い年月が経つても陳腐化はしないこと、そういう附設での核となるもの、それは、もちろん、建学の趣旨であり、そして、校歌の歌詞であります。

しかし、考えてみると、建学の趣旨にせよ、校歌の文言にせよ、表現としては、大仰だし、それに、抽象的です。これだけでは何を始めるべきかということとはわかりません。さらに、「為他の気概」という語句は、附設の創設の頃、板垣先生の時代にはまだなく、原巳冬先生が補われたものですが、多分、それは二十年間の時代の変化を明示的に表されたのかな、と思いますので、國武先生は耳にされたことはないでしょう。しかも、國武先生自身、研究の動機は好奇心にあつた、好奇心は、何か良いことを実現したい、人の役に立ちたい、ということとは中立的であつて、とにかく不思議だ、知りたい、面白い、という感情なので、好奇心の赴くままにとんでもないことをしでかすかともありうるということを言っておられます。ところが、振り返ってみると、先生のお仕事は基本的にわれわれの生き方の改善に繋がっているわけです。このことは恐らく皆さんの場合も同様で、何かを始めるときの事情は、まず、好奇心のような強い感情がもとにあつて、そのことの善し悪しは二の次になっていることが多いだろうと思います。少し、落ち着くと、どの方向に進めようか、改めて考えるときが来ます。そのとき、仕事が大きくて豊かな価値を伴っていればなおのこと、建学の趣旨や校歌にあるような理想や思想が改めて意識しなくても自分の背中を押してくれます。

同窓生の方々を見てみると、何と申すのでしうか、一本筋の通つた愚直さのようなものがあつて、非常に実直な活動をしておられます。集団として眺めたときに、ある特徴が見えてくる、ということとは、これが、附設的なものと言ふべき何か、つまりは、建学の趣旨の反映とわかります。皆さんも、まだまだ先は長いのですが、必ずやそのように振る舞われるに違いないという期待を籠めて、わたくしの式辞を終えたいと存じます。

卒業生の皆さん、本日はおめでとございました。

平成二七年三月二日

久留米大学附設高等学校 校長

吉川 敦